3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎小泉大輔さん
（山元町共同作業所［工房地球村］所長）

震災を機に結ばれた全国、そして地域との絆。さらに強く深くして、メンバーの工賃向上に努める。

— 小泉大輔さん —

— カフェ地球村と小泉さん —

避難所　社協の職員として地震が起きた翌日から避難所の運営をサポート。

山元町社会福祉協議会が山元町より、指定管理を受託している就労継続支援B型事業所「山元町共同作業所（工房地球村）」。2011年当時、作業所の職員の一人だった小泉さんは、発災直後から社会福祉協議会の支援に入り、避難所の運営サポートや災害ボランティアセンターの立ち上げ、被災した現地の調査などを経験しました。「地震の翌日に、中学校で開設された避難所の夜の受付と受入対応を担当しました。教室ごとに地区の近い人同士がまとまって避難できたり、足が悪い人、音に敏感な人などを別室で休ませたりすることができました。また校内で給食を作る学校だったので、お盆や箸を避難者の炊き出しに使って衛生的な食事ができたので、学校の設備は避難所としては向いていると感じました」と当時を振り返ります。

再開　仕事が激減した作業所の安定運営のため、社協と作業所の橋渡し役を担う。

作業所は内陸にあり津波の被害や建物の損壊は免れましたが、町の広範囲が津波で被災したあおりを受け、町内の清掃作業や、イチゴなどの特産品を活用した自主製品の生産など、メンバーが取り組む仕事の2/3が無くなってしまいました。そこで当時の所長が「仕事がなくて困っている！」と町内外に広く発信し続けると、次第に全国から支援の手が差し伸べられるようになりました。一方で小泉さんは、対外的な活動にまい進する所長をサポートし、社会福祉協議会と作業所の橋渡し役として奔走。協議会からのバックアップを得られるよう組織のトップと意見交換し、必要な情報や物資を的確に届けることで作業所運営の安定化に貢献しました。

今後　地域に密着した受託作業や商品開発で、これからの作業所運営を発展させる。

当時の所長や小泉さんらの努力が実り、作業所ではメンバーの描いた絵を活かした新たな商品の開発や、生産を再開した自主製品の販路拡大などで売上が年々向上し、震災から2年後の平成25年度には震災の年の約2倍に伸ばすことができました。その売上のほとんどが宮城県外、全国各地からの発注によるものでした。

震災から時を重ねたここ数年は、いわゆる“震災特需”は落ち着いたものの、いまだに全国のご縁のある方から注文をいただいています。しかし小泉さんはそれに甘んずることなく、メンバーの工賃向上のために次の一手を打とうと考えています。そのテーマは“地域密着”です。「県外の方向けの商品もありますが、今後は県内や町内の人が手に取りたくなる商品を開発していきたいです。また受託作業の方は、地元企業や自治体にお声がけすることで、公園の花壇の管理や商品パッケージのシール貼りを新たに受託するなど、地元との結びつきが深くなっています」。さらに今後は、震災の義援金で整備した敷地内併設の喫茶店『カフェ地球村』の機能拡充も検討しています。震災を機に結ばれた全国、そして地域とのつながりを大切に、新たなチャレンジに向かう小泉さんです。